

Title	渡辺博士の『秘密積立金の推算』を読みて
Sub Title	
Author	池田, 龍蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.7 (1918. 7) ,p.1011(137)- 1016(142)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180701-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

以て叙上の如き高率なる利差の唯一の原因と看做すことを得ず。如何となれば、日英間の現送費は高率に上るとは云へ、千分の十内外(註五)にして、英獨間の現送費に比して千分の五六内外の高率を保てるに過ぎざればなり。従つて、日英間の利差が日佛獨間の利差の二倍内外ならば、兩者の相違は現送費の多少に依りて誘致せられたるものなりと云ふを得んも、夫れ以上の懸隔は國際的貸借上の保険料に起因するものと看做す可きが如し。

過去に於ける日英間の利差は斯くの如く頗る高率に上れども前表に示すが如く、千八百九十五年より千九百〇四年に至る十ヶ年間の平均が六分四厘八毛五絲なりしに、其後の九ヶ年間の平均が三分八厘七毛三絲に過ぎざるを以て、日英間に於ける金融關係が益々密接と爲りつゝあるを知るに難からざるなり。戰時中は種々の變

態的事情の存するものなれば、金利の國際的關係に就きて、斷定的の豫想を試みるを避けざる可からざるも、平和恢復後には歐米各國と我國との間に於ては金利の平衡が従前よりも著しく行はるゝに至る可しと信ず。

註一、或年度に於ては利差の平均が遙かに此以下に降りたることあれど——例へば一八四七年の一厘一毛一絲、一八七三年の一厘一毛七絲、一八八六年の一厘一毛五絲、一八八八年の九毛五絲等——斯くの如き利差の縮小は利子歩合平衡作用の誘致せしものと云ふよりは寧ろ偶然の歩合にして、例外と看做す可きものなる可し。

註二、George Clare: A Money-Market Primer 2nd ed. (1914), p. 16, pp. 15-6 參照。

註三、同上百二十九頁、並に Harley Withers: War and Lombard Street, (1915) p. 45 參照。

註四、倫敦に對しては英獨銀行の公定制引歩合を採りたれば、東京に對しても權衡上日本銀行の公定制引歩合を用ゆるを至當と爲すが如きなれど、我日本銀行の歩合は外國の中央銀行の如く市場の金融狀態を忠實に反射するものに非ざるを以て、市中金利を用ひたり。

註五、水野重也著「改訂増補外國爲替」(大正六年六月發行)

三三五—六頁參照

渡邊博士の「秘密積立金」

推算」を讀みて

池田龍藏

余が常に畏敬して居る渡邊鐵藏博士が、今回國家學會雜誌第三十二卷第六號に於て、「秘密積立金」の推算(一頁—十七頁)なる論文を公にせられた。我が學者間に於てはかゝる種類の問題が非常に有益なるに拘らず取扱はるゝ事が少ないので、余は之を以て學界の慶事と打喜んで通讀した、而して豫期の如く尋常一様の研究にあらざるを知つたのである。

元來博士の所謂秘密積立金とは、使用財貨(土

地建物機械工具等)、營業財貨(原料半製品製品等)、準備財貨(通常有價證券)、及び取引財貨(債權)に對する減額評價と、其の實價との差額を意味するものであるか、其の推算方法は次の如くである。

先づ第一に公然積立金、當期純益金及び前期繰越金の合計を作り、拂込資本金に對する其の百分率を見出して其の拂込資本金一〇〇%との和を假に貸借對照表相場と名付ける、次に其の會社の株券の拂込金額を一〇〇%として之の相場との割合を求め、之を假に取引所相場と云ふ、而して取引所相場と貸借對照表相場との差たる百分率を拂込資本金に乗じたものが秘密積立金の概算額とするのである、例へば拂込資本金六百萬圓にて各種の公然積立金純益金繰越金等の合計が百八十萬圓なれば、後者は前者に對して三〇%で其の貸借對照表相場は一三〇%で

ある、次に其の會社の株券が二百圓拂込で三百圓の相場なれば、其の取引所相場は一五〇%で其の貸借對照表相場との差は二〇%なれば、之を拂込資本金六百萬圓に乗すれば百二十萬圓の秘密積立金がある事がわかる。

如上の如き博士の推算法は其の過程に於て確かに合理的で、然も非常に思ひ付きのよいものだと思ふが、たゞ博士が計算の基礎とせられた取引所相場なるものが、果して會社の「貸借對照表ニ現ハレザル財産價格ヲ含ミタル企業ノ評價」なりや否や、聊か疑なき能はずである、余は此の點につき謹んで博士の御垂教を乞ひたいのである。

博士が實例として計算された銀行の株券の市價に餘りに變動も少く、且つ流通性も同じくないから比較的「貸借對照表ニ現ハレザル財産價格ヲ含ミタル企業ノ評價」に近いものと云つて

強である、故に取引所相場と貸借對照表相場との差は三四八%となる、今之を拂込資本金に乗すれば同社の秘密積立金は五千二百八萬三千八百七十二圓ある事がわかる、次に大正六年十二月末に於ける同社の各種公然積立金純益金繰越金の合計二千二百四十五萬三千四百二十圓、拂込資本金千五百七十八萬六千九百七十圓、之の貸借對照表相場は二四二%強で、同年十二月中の同舊株の當切の平均相場は二百三十二圓九十四錢、之の取引所相場は四六六%弱、之の差二四%なれば、之れによつて推算したる秘密積立金は三千五百三十六萬二千八百十二圓となるのである。

以上は博士の方法に従つて鐘淵紡績株式會社の最近二半期の秘密積立金を推算したものであるが、大正六年上半期末に於ける同社の隠れたる資産と大正六年下半期末のそれと比較する時

も大なる不都合は生ぜぬけれども、大部分の會社の株券の取引所相場に、假令博士の云はれた如く貸借對照表作製月若くは週の平均相場をとるにしても、博士の説に適合するものなりや、否や、余は博士の擧げられなかつた他の實例について少しく研究の歩を進めて見たいと思ふ。取引所株の如く極端に人氣によつて支配せらるゝものは姑く論せずとするも、今隠れたる資産が多いと噂されて居る鐘淵紡績株式會社に就いて計算して見たい。大正六年六月末に於ける同社の各種公然積立金純益金繰越金は合計千八百四十萬四千八百九十四圓である、而して拂込資本金は一千四百九十六萬六千六百三十圓なれば所謂貸借對照表相場は二二一%弱となる、また同年六月中に於ける同社舊株の東京株式取引所に於ける當切(六月限)の平均相場は二百八十四圓五十二錢で、その所謂取引所相場は五六九%

には實に同日の談に非るまでに増加して居るとの事であるにも拘らず博士の推算法によれば實に一千六百七十二萬二千六百圓だけ減少した事となる、これ余の到底信ずべからざる處であるこれはたゞの一例に過ぎないのであるがかくの如き例は尙枚擧するに違がないのである、そこで此の不思議なる數字が何故出て來たかと云ふ事について考へて見ると、博士が計算の基礎とせられた株券の取引所相場なるものが「貸借對照表ニ現ハレザル財産價格ヲ含ミタル企業ノ評價」でないだらうと云ふ事に氣が付くのであるこの株券の市價の決定要素に就ては高城仙次郎先生が詳細なる研究(三田學會雜誌第十一卷第八號一一七頁—一四一頁)を發表されて居るが、要するに其株券に關する需要供給によつて決定せらるゝもので、會社の實質の如きは是等需要供給を支配する一要素に過ぎず、尙人氣や、

金利や、物價等の種々なる重要要素が存在して居るのである、故に株式取引所に於ける株券の相場は如何なる意味に於ても「貸借對照表ニ現ハレザル財産價格ヲ含ミタル企業ノ評價」と云ひ得ないと思ふ、一體大正六年十二月に於ける大部分の株券の相場は同年の六月の比して一般に下落して居るが、こは主として米國の鐵禁輸物價調節令船舶管理令の發布、東西組合銀行の利息引上露國の大政變等の會社の内部に直接關係なき原因によるのであつて、決して會社の實質には關係して居らぬのである、若し博士の計算法を以てすれば大部分の會社が大正六年六月より十二月に至つて秘密積立金が激減せねばならぬが、かゝる事は何人も信じ得られぬ所であつて事實は却つてその反對なのである。

博士は比較的其の株券の相場に變動の少い銀行につき例をとられたから、或は日本銀行日本

錢強であるから、之の所謂取引所相場は一二〇%弱である、故に貸借對照表相場は所謂取引所相場より七%だけ多い事となる、されば近江銀行は大正六年十二月は三十八萬五千圓だけ増額評價をした事となる、事實は同行の秘密積立金が六年六月より十二月には増加して居ると信すべき理由が多いに係らず、減少せるのみならず却つて巨額の増額評價をして居る事となる、之れ何人も疑はざるを得ない所である、何故かゝる珍現象を呈したかと云へば近江銀行は大正六年六月に資本金四百萬圓を六百萬圓に増加し、舊一株につき新一株を割當てたので、六月中の平均相場六十六圓二十錢強は新株の権利をも含んで居り、同年十二月中の平均相場五十九圓九十錢強は新株落の相場なのであつて、其の差六圓三十錢は決して同行の實質には關係ないのである。尙此の増資に關する數字を博士の實例と

勸業銀行橫濱正金銀行第一銀行の秘密積立金は博士の推算額に近いものかも知れぬ、然も銀行株にした所で博士の推算法によると事實に反する現象を呈する事が多い、例へば近江銀行の例をとつて見るに、大正六年六月に於ける同行の拂込は四百萬圓、各種公然積立金純益金繰越金合計が百六萬二千八百五十二圓なれば、之の貸借對照表相場が一二七%弱である、而して同行株の同年六月中の平均相場は六十六圓二十錢強なれば、其の所謂取引所相場は一三二%強である、故に之の二つの率の差は五%で、これによつて推算した同行の秘密積立金は十八萬五千圓である、次に同年十二月に於ける拂込資本金は五百五十五萬圓、各種積立金純益金繰越金合計は百五十九萬九千六百六十七圓だから、其の貸借對照表相場は一二七%強となる、また同年十二月中に於ける同株の平均相場は五十九圓九十

して示された日本勸業銀行第一銀行(日本銀行橫濱正金銀行は博士が計算を認められた卅八年後増資なし)に就て點檢して見たい、日本勸業銀行は明治四十四年六月に増資をして居る、故に博士が計算された如く(國家學會雜誌第三十二卷第六號一五頁參照)明治四十四年上半期に取引所相場が二三六%から下半期には一八四%に激落して居るのは別に不思議はない、故に其の秘密積立金も一千三百七十三萬圓から六百七十七萬五千圓(博士は千九百二十七萬五千圓として居られるか、こは博士が取引所相場一八四・一%と貸借對照表相場一二九・九%との差が五四・二%なのを二五四・二%とせられた結果か、)の數字が出て來たのである、こに激減して居る、また大正三年七月にも増資したので、同年上半期には秘密積立金が千二百六十六萬圓あつたものが下半期には五百六十七萬五千圓に激減して

居る、また第一銀行は大正元年下半年五年下半
期に増資して居るが、これは他の銀行を買収して
増資したので取引所相場には関係ないから、大
正二年下半年の増資の時を見るに、大正二年
上半期には秘密積立金五百三十一萬あつたもの
が同下半年期には一萬三千圓に大激減を告げて居
る(一七頁参照)、かくの如く日本勸業銀行及び
第一銀行が増資の度毎に秘密積立金が激減する
わけはないのである、たゞその株券が新株落な
る爲め下落してかゝる數字を呈するに至つたの
である。

かくの如く論じ来れば博士が取引所相場を秘
密積立金推算の前提とせられたるに無理ではな
いだらうかと思はざるを得ないので、茲に博士
の御高教を仰ぐ事とした次第である。

妄言多謝

於ては財貨の存在量の増加せざる限り決して一
個人の幸福は増加しないのであつて、かゝる場
合に特に己れ一個の幸福を計らんとするには他
人を排して己れ獨り最も多くの貨幣を獲得する
の必要があるのである。茲に於てか此の理由を
意識せるとせざるとは別問題として我利我利主
義は發生せざるを得ないのである。斯くの如く
して勞働の成果を掠奪する資本家もあれば、世
人の命の糧を買占めて迄も自己の懐を肥さんと
する投機師も出づるのである。而して此の理論
はかゝる人々の集合より成る國民經濟に於ける
と同じく又各國より成る世界經濟の上に多少の
制限の下に適用せられ且かゝる自己本位の思想
政策は極度に發揮せらるゝのである。則ちもし
各國の交易に甚だしき障害なきものとせば一定
時に於ける世界人類の幸福は其當時世界に存在
する財貨の量により限らるゝのであつて而して

經濟時事評論

安川 貞三

利己的思想と皮相的經濟思想 靜的狀態の下
にある封鎖的國民經濟に就いて云へば國民の幸
福のよつてかゝる所は其社會に於ける財貨の存
在量であつて貨幣の多少は之と何等の關係を有
するものではないが、而も一個人の立場から云
へば此關係は全く異ならざるを得ないのである
蓋し營利の手段としての貨幣の作用を度外視す
るも貨幣の所有高の多少は直ちに其社會に於て
當時存在する財貨に對する當該貨幣所有者の支
配權の大小を表はすものであつて其幸福の大小
を決するからである。茲に於てか拜金思想の起
る亦已むを得ないのである。然るに此際凡ての
人の貨幣所有高が均一の割合を以て増加するに

此の財貨を何れの國が比較的最も多く之を利用
し幸福を受くるを得るやは其國の所有する世界
的財貨に對する支配權によりて定まるものであ
る。茲に於てか重商主義的思想政策は行はれざ
るを得ない。

斯くの如きは是れ交易經濟組織下に於て已む
可からざる現象であるけれども、而も交易經濟
なるものは決して極端なる一方的我利我利主義
の下に行はれ成立し得可きものでないのである
蓋し交易經濟の下にありて其眞髓をなす營利行
爲を支配するのは自給經濟の下に於けるが如き
慾望ではなくして實は購買力を伴ふ慾望即ち需
要であるからである。此の故に營利行爲なるも
のは他方に購買力を有するものありて始めて營
利として成立するものであつて、他人を壓して
己れ一人利せんとするは交易經濟の性質上許さ
ざる所なのである。只今日の社會に於て屢々一